

「比治山型アクティブ・ラーニング」の構築と実践

—「日本語表現研究」における取組報告—

比治山大学・比治山大学短期大学部

九内 悠水子・三上 露乃・質的転換加速化本部APワーキンググループ

1 はじめに

比治山大学・比治山大学短期大学部は、平成26年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」【テーマI・II複合型】に選定されて以降、学生の生涯学び続ける学修意欲の向上と知識・技能の定着、および地域社会に貢献する力を育むことを目的として「『比治山型アクティブ・ラーニング』の構築と実践」（テーマI）と、「評価指標モデルの構築と学修成果の可視化」（テーマII）に全学を挙げて取り組んできた。本発表は、テーマIの実践例として、現代文化学部 言語文化学科（日本語文化コース）の専門科目である「日本語表現研究」を取り上げ、その取組の報告を行うものである。

2 授業の目的

「日本語表現研究」は先述したように日本語文化コース3年の専門科目であるが、自由領域科目として開いているため、現代文化学部生であれば誰でも履修可能である。学びの成果をどのような形で地域に還元することができるかを考え、実践していく授業である。ディプロマ・ポリシーに掲げている「地域社会や現代社会における諸課題について、その本質を追究する視点と姿勢とを持ち、豊かな発想力をもって解決策を見出す力」の修得を目指し、2018年度は、医療法人社団恵正会・IGL医療福祉専門学校と産学連携プロジェクトを展開した。設定した課題は、広島弁を知らない若年者・外国人介護従事者が抱えるコミュニケーションの問題、すなわち医療現場における「方言の壁」である。

3 授業の概要

「方言の壁」を解消するコンテンツとして作成したのは、広島弁による介護実習ビデオと、広島ことばカルタの2点である。ビデオは、介護の手順だけでなく、現場で使われる広島弁会話を学ぶことができるようなものを目指した。作成に先立ち、まず学生たちは、医療専門学校や介護施設を訪問し、介護の手順やそこで交わされる会話の取材、広島弁の採取などを行い、それをもとに入浴介助・機能訓練といった6つのシナリオを執筆した。広島弁に関しては、現場での採取に加え、方言辞典や、広島弁話者のチェックも行った上で、分かりやすいように、ビデオに字幕・解説を付けた。IGL学生や恵生会スタッフは取材協力ないし演者、ビデオ編集者としてこのプロジェクトに関わった。またカルタは、方言採取に際して書き出した広島弁リストをもとに、医療従事者が広島弁を学ぶ教材としてだけでなく、被介護者のレクリエーション、あるいは介護従事者と被介護者のコミュニケーションツールとなることを想定し、作成した。最後に、本学にプロジェクト参加者が一堂に集い総括を行ったが、その際には、施設で介護者たちが実際にカルタを楽しんだ様子なども報告された。

4 授業の成果と課題

授業開始時に行った受講理由に関するアンケートでは、社会と関わってみたい、コミュニケーション能力を向上させたいといった回答が多かった。また終了後のアンケートによると、本学が育成している「4×3の比治山力」のうち、情報収集力、コミュニケーション力、チームワーク力、創造・表現力等が身についたと実感している学生が多かった。文系の学部学科では、大学での学びと社会との結び付きをすぐに実感するのが難しい分野も多い。しかし授業運営の工夫次第では「自分は何を学び、何を身につけ、どのような力を持つのか」といった自身の強みを意識化させ、社会に接続させることも十分可能である。一方で、これに関わる教員の労力、負担が大きいのも事実である。比治山大学・比治山大学短期大学部では、このような活動を支援する全学的な体制が整いつつあるが、今後もより一層の環境整備を行い、多彩なアクティブ・ラーニングを展開していくことが求められる。